

## ワークショップ 2 (抄録)

# 映画祭と映画上映振興策

## (コミュニティの中の映画祭の可能性)

コーディネーター：志尾睦子

出演者：岩崎ゆう子（コミュニティシネマセンター）

金野侑（みやこほっこり映画祭）

榎一則（みやこシネマリーン）

志尾：私が1999年に高崎映画祭の活動に参加したとき、代表だった茂木正男さんから「東京でしかみられない映画を地方でみるために映画祭を始めた。町おこしとは違う」という説明を受けました。2000年ぐらゐまでは、確かにこの言葉通り、映画祭では地域の映画館で上映されない映画を上映している、上映環境を豊かにするために映画祭が行われているという印象でしたが、この10年ぐらゐで映画祭が変わったというか、それまでとは違うタイプの映画祭が増えたように感じています。シネマ・アミーゴがやっている逗子海岸映画祭のような新しい映画祭に対して、初めは違和感がありましたが、映画祭と地域やコミュニティとの関係を考えて、少しずつ理解ができるような気がしています。2012年にはじまったみやこほっこり映画祭はコミュニティという概念をもとに映画祭を始めたわかりやすい例だと思います。

### みやこほっこり映画祭

#### - コミュニティが一体となるために

榎：みやこほっこり映画祭は、地域のNPO、映画館、様々な団体がいっしょにコンソーシアムを組んで、大きなプログラム“ほっこりみやこ”のなかのひとつのイベントとして行っているものです。今年で3回目になります。

金野：映画祭は2012年の内閣府復興支援型地域社会雇用創造事業の研修事業がきっかけで始まりました。東日本大震災の被災地で、文化で起業できる人材を育成しようという「文化なしごと創造事業」という研修

事業の実習を、宮古市、石巻市、南相馬市で実施することになり、宮古の場合は「みやこほっこり映画祭」、石巻は「ISHINOMAKI 金曜映画館開館フェスティバル」を開催、南相馬ではドキュメンタリー映画『ASAHIZA』をつくるということになりました。

みやこほっこり映画祭は、最初は研修活動として地域の人を巻き込み、宮古という町のあり方を考えながらプログラムをつくっていきました。私は映画のための映画祭じゃない、地域のための映画祭だと言っています。といっても、宮古は三陸沿岸で映画館がある唯一の町ですから、まずは、その映画館の価値の再認識を促すところに映画祭の意味があります。最初は宮古の外の人が多かったのですが、2年目は地元の人たちが受け継いでスタッフとなり、復興を目指すための取り組みとして行っています。

榎：地元で生活していると地元のことを考えることは少なかったのですが、大震災により自分の地域を考えるようになったと思います。特に若い人が自分たちは何ができるのかと考えたとき、地域のコミュニティが一体になれるのはお祭りだと思ったんですね。昔からのお祭りだけでなく、映画祭も映画を使ったお祭りです。私の映画館のほか、地域のNPO、社会福祉協議会、商店街、ジャパン・フィルムコミッション、コミュニティシネマセンター、日本アカデミー賞協会などさまざまなところから協力を得ています。

私は、震災前から、映画館での上映のほかに、学校や公民館などで移動上映もやっています。震災後は避難所や仮設住宅などで、もう300回以上上映をしてきました。そういう上映会では、観客の反応がダイレクト

に伝わってくるところがいいなと思います。それがスクリーン体験ですね。宮古には映画館があるのに、「何十年かぶりで映画をみた」といわれたときはショックでした。でも一回映画をみれば、またみたくなると思っています。震災で映画のことはいったん忘れられていたと思いますが、また思い出してもらいたい。映画祭ならゲストが来たりして、にぎやかで、楽しんでもらえると思います。

**岩崎**：この3年間、シネマエール東北をやって、映画館がない地域にたびたび行ったことが、振興策を考える上でとても大きな影響を与えていると思います。これまでは、あれほど広い範囲にわたって映画館がないこと、映画上映の場がないということを肌で感じていなかったところがありました。

それに、避難所や仮設住宅、児童館などで上映会を開いたとき、観客の方々にとても喜ばれて、こちらのほうが元気づけられるということが何度もありました。東京でもいろいろな特集上映をやってはいましたが、シネマエール東北での上映会を通して、上映者は、喜んでくれる観客がいるから活動を続けるんだと改めて気づかされました。三陸沿岸地域には20年ぐらい前に映画館は無くなってしまっていたのですが、こんなにも映画をみたい人がいたんだと、私は20年以上もコミュニティシネマの仕事をやってきましたが、そのことに気がついていませんでした。

多様な映画を上映することは大事ですが、どういう映画をやるかという以前に、スクリーン体験そのものが重要であるということですね。新しく映画上映の活動をはじめの方々をみて、その仕事の大切さを見直すことができたと思います。

## コミュニティのお祭りとしての映画祭

**志尾**：高崎映画祭は、映画館を持ちたいけれど持てないので映画祭をやろうということでスタートしたものです。年に1回の映画祭はお祭りですが、それを日常的なものにするために、やっぱり映画館をつくらうと、2003年の文化芸術振興基本法の施行やコミュニティシネマの構想に後押しされる形で2004年に映画館「シネマテークたかさき」ができました。

映画館が高崎映画祭の集大成であるならば、映画祭は閉じるべきだという意見が内部から出ました。でも、映画館ができて映画祭という上映活動は必要ではないかと考え、映画祭を続けています。映画祭は、お祭りというコミュニティの非日常の高揚感に押されて行われるのではないかと考えています。

**金野**：今年、「学びを通じた被災地の地域コミュニティの再生支援事業」のなかで「三陸みらいシネマ」というプロジェクトをやっています。被災してからお祭りができないと嘆く地域の人声を聞くと、年1回お祭りに人々が集まることは重要だと感じます。このプロジェクトではお祭りに上映会をプラスするようなことを行っているのですが、地域のための映画祭にするためにはもっと広い範囲で考えたいと思っています。コミュニティといっても地縁的コミュニティなのか、映画に集う人たちのコミュニティなのか、なにをもってコミュニティとするかというのが難しいなと思っています。

**岩崎**：いま、地域の大規模な文化芸術イベントとして越後妻有や瀬戸内、横浜、愛知などの現代アート・フェスティバルが注目されています。文化庁が一番力を入れて支援しようとしているのが現代アートのイベントだと聞いています。映画祭も、そういう流れを考えて、自治体や企業などに対してアピールする方法を考える必要があるのではないかと感じます。内容を考え直すというより、アピールする言葉を考えると、より広がりが出るのではないのでしょうか。新しい協力を得るためのアプローチの方策もみつかると感じています。

## さまざまな映画祭

**長島**：逗子海岸映画祭の長島源です。コミュニティシネマの会議に出ていていつも感じるのは、上映者側からみて作品をどう伝えようかという話ばかりになっていることです。ぼくは観客側からの感覚が強くて、どう映画をみたいかと考えるんですね。逗子海岸映画祭は祭りの中に映画があるという空気を大事にしています。来た人が感じるわくわく感とか、みたときの空気

感を重視しています。海岸で『ET』を上映すると、月の中に自転車が入っていくときに拍手がわきおこるんですね。そういう感じを作り出すことが大事じゃないかと思います。

菅原：仙台短編映画祭は今年で14年目です。仙台は大きな都市なので映画祭自体の認知度は高くありません。1000人ぐらい来てくれるのがやっとです。若い作家の映画を紹介したいということがきっかけで映画祭をはじめました。15年ぐらい前は若手監督の映画が上映される機会がほとんどありませんでした。上映した作家の中から将来大物に化けてくれる人がいるといいなあと思っていますし、いまでも、私たち自身も新しい映画をみたいという気持ちがあります。

2011年に震災のため1回中断するかという話になったとき、いままでつきあいのあった監督さんたちが、映画を作って提供してくれたおかげで、映画祭が続けられました。とても幸運でした。富永昌敬監督から、「映画祭がなくなると映画監督が被災する、なんとか続けてくれ」といわれました。毎年、映画祭の役割を考えながら開催しています。

半田：TAMA CINEMA FORUMは今年で24周年になります。毎年11月後半に1週間程度開催し、動員数は約1万人です。TAMA映画賞は、3年前から1200人のホールで上映しています。公共性を考えて、来年はパルテノン多摩で映画賞のイベントを行います。駅からパルテノン多摩までの広い空間を使った演出を検討しているところです。

いろいろな映画祭をみると、いまはそれぞれのニーズに合うものにするという方向性になってきていると思います。映画そのもののだけでなく、上映環境やゲストトークなど映画の体験をみんなで共有すること、それから、潜在的なお客さんを取り込むためのアウトリーチが大事です。

逗子海岸映画祭は外に広がる映画祭ですが、一方で、閉じられた空間で映画芸術を楽しむというベクトルも大事になってくるのではないのでしょうか。公共性と、ある空間の中での個人的な映画体験というふたつの方向が重要です。

志尾：高崎映画祭でも、授賞式は駅前にカーペットをしいて東京国際映画祭のように派手にやってほしいと言われましたが、私は授賞式が独り歩きをしてしまい、映画をみるという目的を果たしていない気がしていました。でも最近は、まずは地域の人に楽しんでもらうこと、それがスクリーン体験に続いていくという考え方が大事で新鮮だと思っ直しています。

森宗：映画は、作る人、みせる人、みる人とそれぞれ役割を分担しています。でも映画祭は複数の人が作る、みせる、みる人となり、かつ、それぞれの人が盛り上げる場でもある。映画祭は楽しむものということで誰もが平等であり、お祭りでもあり、楽しくお酒を飲む場にもなります。

また映画祭には拡張性があります。映画館での鑑賞形式とはちがって、こんな見方もあるのかという拡張性です。ハイブリッドという言い方もできると思います。通常の映画のお客さんでない人といっしょにみたり、よりアーティスティックな映画がかかったりして、社会へのアプローチや外部との関係性などがふくらんで、現代アートにもなるんですね。何もないような地域でクリエイティビティを出すことはアートだと思います。

## 野外上映の魅力

岩崎：インスタレーションなど、現代アートは外に展示するのでだれにでも見えます。他方、映画は室内に入ってみるものなので外からわかりにくいということがあると思います。KAWASAKI しんゆり映画祭などをみても、たくさんお客さんを集めているのは野外上映ですね。このごろは野外上映がはやっているのではないかと思います。石巻では震災後、STAND UP WEEKというお祭りが始まったのですが、その前夜祭は野外上映が定番になっています。ドラえもんの新作を上映することが多いのですが、今年は400人ぐらいが集まりました。

お祭りであっても野外上映でも、映画を選ぶという作業はあります。作品の選択に主催者側の思いをこめることはできるはずだと思います。

**酒井**：KAWASAKI しんゆり映画祭は今年 20 年になる映画祭で、最近の特徴は、野外上映もそうですが、「イベント」です。『プラス!』を上映したときは、プラスバンドの人がヘルメットをかぶり、ヘッドライトをつけ、その明かりで演奏してもらいました。みんなが共感するいろんなことをやっていくのが特徴です。

**鶴岡**：今年 7 回目になるちば映画祭では、若い監督の作品をメインにセレクトして上映しています。私は、上映ははじめに、それ以外はイベントで遊ぼうというノリでやっています。前は、監督をお迎えするときに、お客さんにサイリウムをもってもらって音楽にあわせて振っていただきました。昨年は上映後のライブに千葉のゆるキャラをよんで、映画祭のオリジナルテーマソングを歌いました。映画祭のテーマソングって…と思われそうですが、こういう無駄なところが大事じゃないかと思うんです。

若手監督の作品を上映するだけだと、そういう作品が好きな人しか呼び込むことができないので、イベントも重要です。映画祭を続けていくうちにコミュニティや公共性ということを考えるようになりました。

## さらに、さまざまな映画祭

**長島**：逗子海岸映画祭では、最初は前座のミュージシャンのライブの観客が残ってついでに映画もみていくという感じでしたが、去年ぐらいから作品に関係なく、逗子海岸映画祭の空気を味わいに来る人が増えています。

逆に、そのような状況があるため、かなりマニアックな作品も上映できたんですね。映画祭の集客力だけでみせられる環境ができたなら、王道的批評性があつたうえでマイナーな作品をやることができますが、そうではない場合、派生的につくった環境と組み合わせる可能性もひとつの考え方としてあると思います。

それから逗子海岸映画祭の母体は、シネマ・キャラバンという屋外上映やライブ、食、ものづくりなど他の団体と一っしょに逗子以外の地域でもトータルに空間演出するアート集団になっています。映画祭の助成以外に、地域の町おこしに商工会の補助金がおりてキャラバンを呼んでもらい、屋外上映をしています。

また長崎や夕張などに、アート・プロジェクトの一環として現代アート作家の方とシネマ・キャラバンがよばれて、トータルな演出のなかで映画をみせるということもしました。アート・プロジェクトの中に映画を組み込ませると、映画祭にとって別の展開があるのではないかと思います。

**志尾**：コミュニティという視点から、他の機関とのコラボレーションがあるということですね。

**近藤**：私が逗子海岸映画祭でいいと思うのは、コミュニティの中でいろんなジャンルが混じって活動していることです。地域のなかでは音楽、芸術、ダンス、映画など分野がちがうと案外ばらばらで、お互いのイベントのことも知りません。分野の違いをとりはらってお祭りをやれたらいいと思います。

**藤重**：湯布院映画祭は今年、39 回が終わりました。湯布院映画祭でも、夜、湯布院駅を背にしてスクリーンをはり野外上映を行い、通常の上映には、駅の近くの湯布院公民館という古い建物を使っています。新作を出してくださる配給会社は少なく、毎回、映画選びに苦労していますが、地方にいると情報が届かないので、情報収集の努力をしないといけないと思いました。

**後藤**：ゆふいんこども映画祭は市の教育委員会の主催で開催しています。今年 26 回目を迎えます。最初はワークショップを行っていましたが、ここ最近では上映がメインです。大人に、子どもの映画を子どもといっしょに楽しんでほしいという願いをもっています。子ども向けのバス送迎があり、大体 300 席の会場はうまいますが、夜にかけて参加者数が少なくなっていくのが課題です。

**水口**：キンダーフィルムフェストきょうとは、今年 20 回目を迎えます。ベルリン映画祭のジェネレーション部門で行われている子どもが審査員になるというシステムを持って来たのですが、私たちのところでは子どもは審査員だけでなくスタッフにもなります。企画を考え、司会やゲストの外国人監督への質問もします。

子ども審査員は、自分たちで議論して海外の映画祭でかかった作品から授賞作を選びます。最後にグランプリを発表するときには自分の考えを話す。子どもたちは、映画を通してメディアリテラシーを学んでいます。映像を読み解くことを学び、映画をつくるようになってほしいとも思っています。

それ以外に、子どものアニメーション・ワークショップを開き、映画の原理である動く絵のおもちゃを作り、ストーリーを考えたり、子ども同士の共同作業で作品を作っています。ワークショップに参加した子がオープニング映像を実写やアニメーションでつくります。子どもがつくったアニメーション作品が大人のコンペで賞をもらったり、外国の映画祭で上映されたこともあります。

外国の映画祭の作品には字幕や吹き替えがないので劇団の俳優の人に声優をしてもらいます。また、短編映画では子どもに声優もやってもらっています。

京都の人口は150万人ですが、来場者は4日間で1000人がいいところです。大人が6割ぐらいで、親子でみに来てくれます。今年の開催日には大雨洪水警報が出ていたのですが、大雨の中にきた親子づれの方々がいて、若手監督たちとのシンポジウムには約60人が参加してくれました。

映画祭はボランティアで運営しています。予算規模としては250万円ぐらいです。いくつかの助成金を得ながら赤字にならないように、どう開催するか考えつつ行っています。

20年続けてきたのでスタッフも高齢化し、ここで切りをつけようと考えたのですが、子どもスタッフが来年もやるという計画を立てたので続けることになりました。

**志尾：**きょうは、”コミュニティ”をキーワードにして映画祭映画祭のいろいろな形や方向性を話してきましたが、皆さん、それぞれ工夫をして映画祭をつくっておられます。こういう場に、それぞれがぶつかっている課題や疑問点を持ち寄ってお互いのヒントになればいいなと思いますし、それを、これから考える映画振興策につなげていければと思います。

(2014年10月23日)